ミュージアムコレクション 26

記念品？儀礼用？ イノシシの下顎骨

●コレクション・データ

時　　代　弥生時代　前期
調　　査　唐古・鍵遺跡　第37次調査
発 見 年　1989年
大 き さ　長さ31.5㎝、幅16.75㎝
　　高さ12.6㎝
展示位置　第1室　「まつりといのり」

2007年は「亥年」。この干支にちなんでイノシシに関係する資料を紹介します。

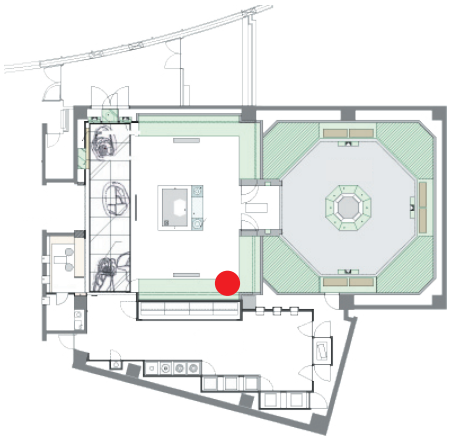
今回紹介する資料は、牡（おす）のイノシシ老獣の下顎骨です。二股に分かれた下顎の両側に径3㌢ほどの穴があけられ、2本の牙は腕輪にするためか抜き取られ、代わりに木製の牙が差し込まれているものです。捕獲したイノシシの強暴さを見せるためにわざわざ木製の差し牙をこしらえたのでしょうか、他に例のない資料です。

イノシシの下顎に穴をあける例は、唐古・鍵遺跡でも十数例あり、西日本の弥生遺跡でも確認されています。なかでも岡山県南方遺跡では、下顎の穴に棒を通し12個連ねた状態のものが出土しています。また、穴をあけずに14個のイノシシ下顎を棒に引っ掛けた状態のものや7個の下顎を集積したものが唐古・鍵遺跡から見つかっています。

このようなことから、弥生時代には捕獲したイノシシの下顎を吊す、あるいは架ける風習があったことが分かります。

家の鴨居（かもい）に下顎を掛けるような例は、熊本県五家荘村（ごかしょうむら）やインドネシア・スンバ島など民俗・民族例にあり、狩猟の記念品的な意味合いがあったといわれています。このような例に相応するように、弥生遺跡出土の穴をあけたイノシシ下顎は、牡の成獣が多いのです。

一方、穴をあけず集積した下顎などは、牝の若獣が使われている例があります。これはイノシシの多産にあやかり、豊作・豊猟の儀礼に使われたという考え方もあります。また、下顎が鉤状を呈していることから、「魔除け」的なものという意見もあります。

いずれにしても、イノシシは食用というだけでなく、弥生の人々の精神的な部分まで深く関わりのある動物だったといえるでしょう。

ミュージアム上面図と展示位置